

21世紀ひょうご市民学会 会報

17号
2011年6月1日

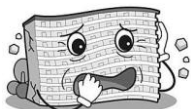
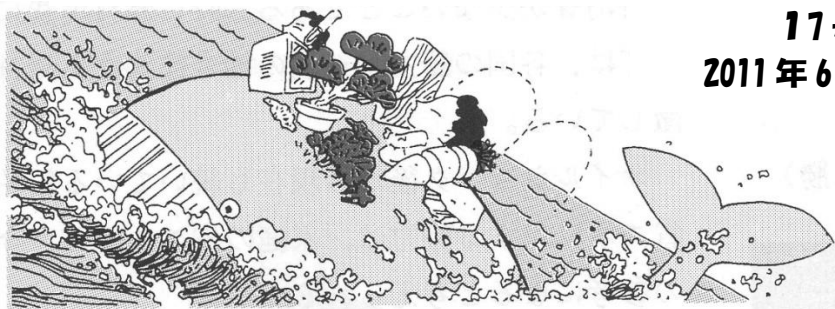
—編集・発行—

21世紀ひょうご市民学会

「神戸生活創造センター」登録番号 630

代表世話人 澤木昌典

<http://www.hyogo21ctzn.com>



「自然は最強の対策にも挑みかかる」

3月11日に宮城沖で起きたマグニチュード9.0の巨大地震による東日本大震災。

被災された皆様に心よりお見舞い申し上げますとともに、被災地の1日も早い復興を祈念致します。

「3月20日付1面ジョン・シュバルツ記者」より

これは東日本大震災後の翌週に出た3月20日付NYタイムズ・ウィークリー・レビューの1面に載った評論記事で、原発事故関連記事(1面トップ)に並んでの評論記事で、個人や家庭の防災準備の推進の必要を説いています。ウィークリー紙はこの中で、豊かで技術立国でもある日本。多額の投資、厳しい耐震建築基準等で地震や津波に十分備えてきたはずの日本。その日本が今回の地震災害を防げなかったことは、自然相手には最善とされる対策にも限界があることを示したとしています。

そしてこれは、米カリフォルニア州のURSコーポレーションの地震研究者ウォン氏にとっても大変ショックでした。同様の地震の可能性が米国にも当てはまるためです。同氏が注目するのは、太平洋北西部にはカスカディア断層(注:オレゴン州沖)と呼ばれる断層が沖合海底を走っていることです。この地域の内陸部は人や企業の集積が薄いので、地震が起きても日本のような甚大な被害にはならないと考えられてはいますが、ダム建設等地震対策はまだ不十分とされています。

またレドレー全米防災センター長(コロンビア大)は、ニューマドリッド断層が動いた場合、ミネアポリスとセントルイスの両方を同時に完璧に災害から守ることは至難だ、と述べています。

自然相手にハードの防災では限界があるので、被害減少は事前準備如何だとし、米国の場合、道路や橋などの対策以上に、精神面の準備が貧弱だ、とレドレー博士は述べています。具体的には、食料品、薬、重要な家庭用紙類、災害時の家族再会計画…などの準備が米国も含めほとんどの国できていないと指摘しています。特に米国に関しては全体としての防災対策が日本のレベルにさえないのは大きな問題だと警告しています。こうした事前準備(注:つまり防災意識の高まり)が決定的に重要だというのはヒューゲイト連邦危機管理局長ですが、それは「今回の日本の例でも分かったように、地震は警報なしにやってくるから」というのです。そのうえでレドレー博士は、人々は大きな自然災害でもすぐ忘れてしまうが、常に警告として思い返すことが重要との趣旨をたとえ話で述べています。(YN)

これからの予定

- 第19回知的サロン 6月16日(木)15時~17時
場 所 : 神戸生活創造センター 5階学習支援室
話 題 : 生駒に伝わる三つの伝説
話題提供者 : 野口 民治 氏

*出欠用返信ハガキを同封しています。

- 平成23年度(第5回)総会を7月16日(土)14時~16時に開催します。
場 所 : 神戸生活創造センター 4階創作工房B
*当日「まちなみ景観の研究」の研究発表があります。



第18回 知的サロン 2011年4月22日

神戸歴史探訪ウォーキング

『平清盛の魅力は神戸から』に参加して

苗村 康弘



豊田先生

第18回知的サロンは小雨降る4月22日(金)午後1時半から、平清盛ゆかりの湊川周辺を舞台に、語りと散策の形で行われました。3月11日に起きた東日本大震災被災者へのお見舞いと被災地の1

日も早い復興を心で唱えつつ、引率はいつもの通り、平成22年度神戸市文化活動功労賞を受賞された豊田實先生(当学会会員、神戸歴史クラブ理事長)、参加者は11名(豊田先生を含む)でした。

市営地下鉄湊川公園駅東改札出口に集合、先生から当日のウォークの目的、福原と平清盛についての説明がありました。

『平安後期、当時の実権者・平清盛によるいわゆる福原遷都(1180年、治承4年)兵庫区荒田町～同区雪御所町周辺)は約6カ月というごく短期間ではあったが、神戸に都がおかれ天皇(安徳天皇)が在所された。清盛は遷都前の1167年(仁安2年)、太政大臣を退いて以降、1180年(治承4年)11月に京都に遷都するまでの13～14年間、摂津(神戸)・福原を隠居地として移り住み、同地にこよなく愛着を持っていた。この間、福原は日本の政治の中心地となり、清盛は大輪田の泊の改修、対宋貿易の振興のほか、六甲山南斜面で西は須磨のあたりから、東は宇治川(再度山中から大倉山東を流れハーバランド東に注ぐ)あたりまでの地に、京の都を模した都の構築(福原・和田京)を推進しようとしていたと言われる。

平家滅亡(1185年、元暦2年)後の源氏の世になって書かれた歴史書、「源平盛衰記」などでは清盛は悪者の

ように描かれざるをえなかったのだろうが、そのことが後の人々に清盛の印象を悪くしていることは否めない。しかし神戸にとって清盛は、大輪田の泊(兵庫の津ないし神戸港)という経済インフラの整備を通じて、商業や内外貿易の振興に尽くすなど、その後の神戸発展の礎を作った人物として大恩人とも言うべき人物である。

歴史解釈に「もし」は禁物ではあるが、もし清盛や平重盛がもう少し長生きしていれば、源平の戦いも避けられたかもしれないし、そうなれば福原の都も、もっと繁栄していて神戸の歴史価値の底上げにもなったと思われる。来年、NHK大河ドラマでは平清盛が取り上げられるとのことであるが、その際、福原(神戸)の舞台がどのように取り上げられるのか、興味があるし注目してゆきたい』

このあと、「湊川公園駅(市営地下鉄)→幼帝・安徳天皇位牌が安置される宝地院→安徳天皇行在所址と平頼盛山荘址の碑が立つ荒田八幡神社→勝海舟寓居跡→清盛の邸宅(伝)跡に近くて約90段の石段の丘に立つ祇園神社(祭神は素戔鳴尊<スサノオノミコト)>→清盛も入浴したとされる天王谷川沿いの湊山温泉→天王谷川と石井川の間にあったとされる清盛の別荘・雪の御所(伝)跡碑(湊山小学校校庭)→平野・市営バス停」のコースを約3時間に亘って散策しました。

小高い丘の祇園神社境内から、当時の日本の実権者・清盛らが



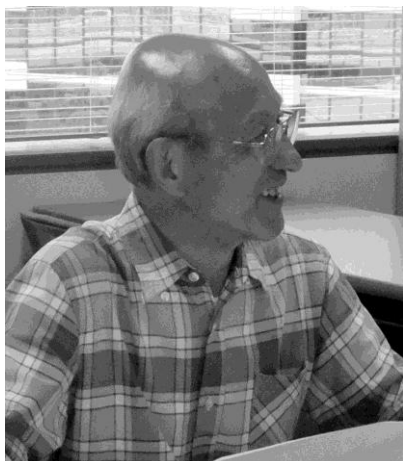
勝海舟寓居

大輪田の泊を眺め日本の将来の繁栄を夢見て、疲れると近くの湊山温泉で取り巻きの一行と体を休めていたかも、など思いを巡らしますと、単なる森や丘、また山や神社や川からも、何だか歴史の鼓動が聞こえてくるような気がするから不思議です。以上、830年以上も昔の日本の首都・福原(神戸)の一角を見た1日でした。豊田先生有り難うございました。

研究活動

第3回～第5回研究会の概要

野口 民治



野口 民治さん

本年度の研究会は前年に続き「まちなみ景観づくり」をテーマに進めております。前年度の概要は会報14号

でお伝えしましたが、本年度は「歴史的まちなみ景観をもつ地区」に絞って研究を進めることになりました。対象地域として「たつの市龍野地区」を選び、平成22年11月11日にこのまちなみを見学(第2回研究会、会報15号に記事)。その後、第3回研究会、第4回研究会の2回にわたり見学結果についての考察を行い、第5回研究会では、この2年間の研究成果のまとめ方を議論しました。

◆◆◆ 3回研究会(23年1月13日) ◆◆◆

11月11日の見学会当日、参加者に「印象に残ったまちなみ景観」と「歴史的まちなみ景観の保全について感じたこと」を記入、提出して頂きましたが、第3回研究会ではこれに加え、特に印象に残った場所の写真映像も持ち寄って感想を話し合いました。

印象に残ったまちなみ景観として共通して指摘されたのは白壁・土塀の続く「武家地ゾーン」の見事さ、そして明治から昭和初期にかけての町家の外観が温存され、現在は別用途に利用されていたりする「町家ゾーン」の面白さでした。また、道路の舗装や川筋の柵などに景観への配慮が感じ取れる反面、エアコン室外機、消火栓、自販機、電力計や電線・電柱、反射鏡などに今一步の工夫が欲しいという指摘もありました。

まちなみ保全への、行政側の熱意と歴史あるまちなみを大切にしようとする住民の努力も、全員が共通して感じたことでした。市が作っている景観ガイドラインは今まで見学した他の都市には見られぬ詳細なものであり、担当者の注力はなみなみならぬものだという指摘、町中にゴミがほとんど見あらず、また、この外観を維持しながら日々の生活を営む住民の苦勞、それを支えるこのまちへの愛着と誇り、これもまた、共通しての感想でした。

◆◆◆ 第4回研究会(3月10日) ◆◆◆

第3回研究会で話し合われた「たつの市龍野地区のまちなみ景観」が今後も保存されていくうえでどのような留意点があるだろうか、これが第4回研究会の主題です。

部分的にこれまで見学した他の都市との比較も考えながら、また、たつの市の、特に高校生を中心とする活発な町おこし活動の紹介、他の類似地区でのまちなみ景観保全活動事例の紹介なども交えて議論がなされました。特に議論の中心になったのは住民の気持ちの問題。一つはこのまちに住み続ける定住意識、もう一つは外部からやってくる観光客に対する感情です。後者に関しては、このまちが観光地になることを目指しているのか、その必然性があるのかという点と、商業を営まない一般住民にとって、観光客が増えることでどんなメリットがあるのか、むしろ迷惑な存在ではないのかという点で、篠山や明石、大阪市空堀地区などの例が併せて語られました。

また、他地区の事例からは、歴史的景観を残す地域では特に高齢化・過疎化の進行から生じる空き家増加への対応策が重要なことや龍野地区でも指摘された電線・エアコン室外機への工夫などが注目されました。

◆◆◆ 第5回研究会(5月12日) ◆◆◆

本年度最終の研究会として、2年間にわたった研究をどのような形でまとめていくかが話し合われました。

前回(第4回)、中川さんから、たつの市龍野地区を中心としながら、見学してきた大和郡山市と尼崎市も含めて、いく



第5回研究会風景

つかの軸を設定して整理していく試みが提案され、これを発展させて「まちなみ景観の現状と保全についての考察」をマトリックス状の対比表にまとめてはどうかという提起がありました。このため、まず、その軸となる項目(考察のための切り口)について議論しました。

…次ページに続く

議論の中で提案された主な項目や内容を挙げてみますと:

- (1) それぞれの町の性格とその変化。
- (2) その町の主な産業あるいは財政基盤など。
- (3) まちなみ景観に対する首長の考え方(公約やホームページなどから)。
- (4) 都市計画での位置づけ、景観条例・ガイドライン・保全地区の指定などの有無。
- (5) どんな景観資源、重要文化財、重要伝統的建造物があるか。これらがどんな形で保存され、保全への配慮がされているか。

(6) まちなみ景観保全と関わりの深い行事など。これらについて、気づいた点、不安な点、改善点、議論点などをできる範囲で各人が書き出してみることに。

(7) そしてそれぞれが、自分がその町、その家(重文など)の住民であったら保全についてどう考えるか。住宅あるいはまちなみを現代の生活スタイルとどのように折り合わせるか。

を考え、記述し、2年間の研究成果としてまとめることとなりました。結果については平成23年度総会で報告する予定です。



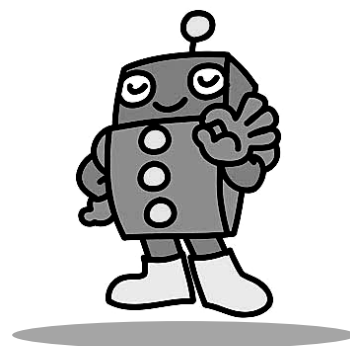
レアアース・メタルの精製、 新展開か — 塩野さんの予想どおり

苗村 康弘

会報第16号(平成23年4月11日発行)で、塩野さんはレアアース・メタルの状況について、「(今世界的に不足状態にある)レア・メタルも経済的な精製方法や採掘方法が見つければ、逆転することもあるのでそんなに心配することもないのではなかろうか」との趣旨を述べられています。

まさにそのような展開が3月20日付週間ニューヨーク・タイムズ(5面)に「マレーシアでレアアース・メタルの精製に挑む」として出ています。マレーシアでオーストラリアの鉱山会社(ライナス社)が2年以内の稼働を目指し世界最大のレアアース・メタル精製工場を建設しているということです。完成すれば世界の1/3の需要を満たすほどの生産量になるとのことですから、中国がほぼ独占の市場に大きな風穴を開けることになります。鉱石はオーストラリアから運び、マレーシアの工業港・クアンタン港北方の精製工場で精製される計画です。

高騰した現在の製品市況からすれば生産は経済的にもペイするようですが、課題の一つは地元リスクがかかる精製時の公害防止が新しい技術で計画通り行くかどうか、もう一つは供給増を見越して製品市況が下落してしまわないかです。少なくともこの2つの問題が順調にクリアされれば塩野さんの予想が現実のものになるでしょう。



あとがき



7月24日の地デジへ移行*1まで後わずかとなりました。皆さんのお家の準備はお済みでしょうか。地デジは今、世界50カ国・地域に普及、日本の地デジ規格も南米ブラジル*2を中心に採用が進んでいます。いよいよ放送もデジタルの時代に入ります。

(注) *1:地デジ移行:岩手、宮城、福島県の三県は最大1年延期。*2:日本規格の改良版。